

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	ソシユールの政治的言説 : 19世紀末の歴史的事件とソシユールの政治的立場
Author(s)	金澤, 忠信
Citation	フランス文学 , 28 : 17 - 30
Issue Date	2011-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041111
Right	
Relation	



ソシュールの政治的言説¹⁾ ——19世紀末の歴史的事件とソシュールの政治的立場——

金澤 忠信

1. 差し挟まれたテキスト

1894年11月10日、フェルディナン・ド・ソシュール(1857-1913)はアメリカ文献学協会から一通の手紙を受け取る。内容は、同年6月7日に亡くなったアメリカの言語学者ホイットニー(1827-1894)への追悼文の執筆依頼だった。しかし結局追悼文は送られることなく、70頁余りの草稿だけがのこされた。ソシュールの死後、弟子のシャルル・バイイ(1865-1947)とアルベール・セシュエ(1870-1946)は、『一般言語学講義』²⁾を編纂する際に原資料としてその一部を使用した。その後ルドルフ・エングラー(1930-2003)による『校訂版』³⁾には追悼文の草稿全体が収録され、バイイとセシュエが『一般言語学講義』を事実上執筆する際にどの箇所を採用・参照したのかも分かるように編集されている。

ところで、この追悼文の草稿には、ホイットニーにも言語学にもまったく関係のない、当時の政治状況に関する文章が二つ、突如割り込むかたちで挿入されている。いずれも『一般言語学講義』の編者たちは目を通してはいたはずだが、それについては一言も触れず、『校訂版』ではそれを無視して頁づけがなされている。

挿入された二つのテキストのうち、一つは「日清戦争の哲学」と題され、極東アジア地域でのイギリスの植民地政策のふがいなさや大国としての凋落について言及している。もう一つは、当時のユダヤ人問題について述べたものである。

パリ、『ラ・リーブル・パロール』編集長様

フランス全体がユダヤ人に関して信じ込んでいる二つの誤謬のうち、ドリュモンが一つを叩き壊しました。彼は、フランスの市民権が最大限1792年以上に遡るユダヤ人は(ポルトガル系ユダヤ人10人程度を除いて)一人もいないということ、そしてこの寄食者の群れがフランクフルトを離れてパリに押し寄せて来たのは一般にかなり最近、たとえば1830年頃であることを立証しました。

もう一つの誤謬は、大真面目に我らがユダヤ人によって広められたものですが、彼らが西洋の諸国家に溢れかえるようになった理由は []⁴⁾

ウェスパシアヌスの息子である皇帝ティトゥスは、68年頃にユダヤ地方で彼らに苦難をもたらしたとされます。だとすると、我々はローマの継承者とし

て、文句を言うべきではありませんが、しかし 1800 年前にイスラエルの民に対してなされた不公平の永遠の帰結をそろそろ見なければなりません。

今日世界にユダヤ人たちがいるのはティトウスがユダヤ地方で戦争をしたからだとなつていくなら、それはとても結構なことでしょう。ですが実のところ、ユダヤ人たちはティトウスのずっと以前から帝国内のいたるところに高利貸しの植民地を設けていたのです []⁹⁾

このテキストは、当時パリで発行されていた新聞『ラ・リーブル・パロール』の編集長に宛てた手紙の草稿である。『ラ・リーブル・パロール』は右翼系の新聞で、エドゥアール・ドリユモン (1844-1917) はその創刊者である。一読して明らかのように、ソシユールはドリユモンを引合いに出し、その説に賛同している。しかも「我々」を「ローマの後継者」とみなし、ユダヤ人の離散の原因は「1800 年前」のローマ帝国時代のユダヤ戦争 (第一次、68-70 年) にあるのではなく、「ユダヤ人たちはティトウスのずっと以前から帝国内のいたるところに高利貸しの植民地を設けていた」、つまりユダヤ人たちは金融業を通じて自ら世界中に進出していったのであり、ローマ帝国と「ローマの後継者」にユダヤ人の離散の責任はなく、今や「不公平の永遠の帰結」を見なければならぬ、と述べている。ソシユールが具体的にドリユモンのどのテキストを参照しているのかは明らかではないが、いずれにせよ、この草稿に反ユダヤ主義を認めないことは難しい。

反ユダヤ主義と 1894 年 11 月 10 日という日付に関連して、このときフランスで大きな事件が起こっている。もちろンドレフュス事件である。アルフレッド・ドレフュス大尉 (1859-1935) が逮捕されたのは 1894 年 10 月 15 日のことであり、10 月 29 日になって『ラ・リーブル・パロール』に一将校の逮捕と軍当局の沈黙に関する記事が掲載される。そして 11 月 1 日には『ラ・リーブル・パロール』をはじめ各紙が一斉にドレフュス逮捕を報じている。当時ジュネーヴにいたソシユールは、パリで発行されていた新聞や地元紙も含め、複数の新聞を読んでおり、ドレフュス事件のことは当然知っていたはずである。この手紙の草稿の執筆時期はホイットニー追悼文を依頼された 11 月 10 日以降であることは確実なので、これはドレフュス事件にたいするソシユールの最初の反応と断言していいだろう。

2. ソシユールの政治的言説

1996 年にジュネーヴのソシユール家で新たに多くの手稿が発見された。このうち一般言語学に関するものはすでに公刊されている。¹⁰⁾しかしこの新資料には言語学に関するものだけでなく、手紙の草稿や私的なメモ、学生時代のノートなどが含まれ

ていた。なかでも特に異質な印象を与えるのが「論争的・政治的主題に関する様々なテキストおよび手紙の草稿」と題された一群の手稿である。これはテーマ・内容に鑑みて大きく次の三つに分類される。(1) ジェイムソン襲撃事件 (1895年12月29日～1896年1月2日)の直後に書かれたと推定される一連の手稿。(2) オスマン・トルコによるアルメニア人虐殺に関する手稿。(3) ドレフュス事件に関する手稿。

今回は紙面の都合上、そのうちのいくつかの手稿を紹介するにとどめる。特に(1)の手稿に関しては、引用は割愛し、ごく手短かにその概要および特徴を述べることにする。

2. (1) ジェイムソン襲撃事件

当該の手稿では、南アフリカでのイギリスの失態が批判され、ホイットニー追悼文に挿入された「日清戦争の哲学」と同様、イギリスの軍事的・政治的弱体化が揶揄されている。イギリスは第二次ボーア戦争 (1899-1902) でオレンジ自由国とトランスヴァール共和国を大英帝国領に併合しているが、ジェイムソン襲撃事件は第一次ボーア戦争 (1880-1881) でイギリス側が敗北したあとの出来事であり、ソシュールはそこに衰退の一途をたどるかつての強国の惨めな姿を見たのだろう。またソシュールは『ル・タン』紙の「日曜時評」執筆担当者に宛てて、トランスヴァールの金鉱で採掘された金の行き先について問い尋ねる手紙を書いている。その手紙の末尾には「あなたの時評の常連読者より」⁷⁾とあり、ソシュールは『ル・タン』を愛読していたことが窺える。この手紙が実際に投函されたのかどうか、名宛人とのやり取りがあったのかどうかは不明だが、少なくとも、ドレフュス事件のときと同様、ソシュールは手紙を通じて歴史的イベントに関与しようとしたと言える。彼は周囲に、自分は「書簡恐怖症」⁸⁾であると漏らしていたが、こと時事問題に関しては新聞の論説員に手紙を書くほど積極的だった。

2. (2) アルメニア人虐殺

アルメニア人にたいする最初の大規模な虐殺は1894年から1896年にかけて、オスマン・トルコ帝国アブデュル＝ハミト二世 (1842-1918) の専制期に行われた。オスマン・トルコ領内のアルメニア人居住区で起こったこの一連の出来事は、当初から新聞報道を通じて西ヨーロッパに広く知られていた。おそらくソシュールも新聞記事を読んでこの事件に関心を抱くようになったのだろうが、彼の周りにはアルメニア問題に深く関与し、救済活動に携わった人物が何人かいる。まず最初に挙げられるのはレオポルド・ファーヴル (1846-1922) である。ファーヴルは当初はサンスクリット語の研究を志し、その関係でソシュールがパリ言語学会へ入会を申請した

際に仲介役を果たした人物である。また、ルソー『エミール』の手稿の出版を手がけたり、自身ピアニストでもあって、ジュネーヴ音楽院で副院長を務めたこともある。ファーヴル家とソシュール家はいずれもジュネーヴでは名家であり、もともと家族ぐるみの付き合いがあった。弟のエドゥアール・ファーヴル（1855-1942）は竹馬の友で、ライプツィヒ留学をともにし、ソシュールが亡くなったときには追悼文を書いている。⁹⁾

レオポルド・ファーヴルは、1896年8月15日にベルンで開催された、オスマン・トルコによるアルメニア人虐殺に抗議するための会議で、スイスのアルメニア人救済委員会の三人の代表の一人に選ばれている。その後もスイス・アルメニア人救済委員会の開催・運営に携わり、1897年2月にはジュネーヴ支部長として孤児院視察のためにコンスタンティノープルへ赴いている。アルメニアへも1903年から1909年までのあいだに計6回訪れ、主に孤児の救済活動に従事した。ソシュールは1903年に書いた「回想録」¹⁰⁾のなかでパリ言語学会入会のエピソードとともにファーヴルの名をあげているが、このときファーヴルがアルメニア人救済活動をしていることを知らなかったとは考えにくい。

ファーヴルがイスラム圏で抑圧されているキリスト教徒のアルメニア人たちの救済に立ち上がったのは、敬虔なキリスト教徒だった彼の妻の影響があると言われている（彼の妻は息子を生んだ直後に亡くなった）。¹¹⁾また彼はアルメニア人救済活動を通じて、のちに人権同盟の総裁となるフランシス・ド・プレサンセ（1853-1914）や、詩人で活動家のピエール・キヤール（1864-1912）らとも親交を結んでいる。キヤールはソシュールがパリでしていた講義に出席したことがある。¹²⁾やはりパリ時代の教え子で、ソシュールの講座を引き継いだアントワーヌ・メイエ（1866-1936）は、1890年にアルメニア地方で調査を行ったことがきっかけでアルメニア語を研究し、1902年にはパリ東洋語学院でアルメニア語の講座を担当している。メイエはアルメニア人活動家で詩人のアルシャグ・チョバニアン（1872-1954）とも交流があった。

ソシュールは、アルメニア問題に関して、ファーヴル、メイエ、キヤールらとはまったく異なる立場を取る。ソシュールの政治思想上の立場は、彼に温厚な人格者を見る読者にとっては、かなり意外に思われるかもしれない。

我が善良なるプレサンセ氏よ、＜私としては大いに遺憾なのだが＞、あなたの尻を蹴飛ばす役を担うのは、スルタンその人、あなたの良き友アブデュル＝ハミトであり、あなたは18ヶ月前にその一撃を甘受した。

今度ばかりはもはや「情緒的な人たち」——民族の虐殺が [] だと理解し

なかった大間抜けな人たち——ではなく、[]¹³⁾

原文は書き直しや空白部分があつて読みにくいのだが、途中の空白部分の直前では、「情緒的な人たち」のことを、「一集団全体——その集団がアルメニア人であれ——が処刑台へ連行されることは当然起こりうる事態であると思わなかった」（「大間抜けな人たち」と書いてから抹消線を引いている。もちろんソシュールはアルメニア人虐殺に賛同しているわけではないが、プレサンセら人道主義にもとづく活動家たちに共感することなく、むしろその純真素朴さを批判している。

アルメニア人虐殺事件の経緯を簡単にたどっておくと、まず 1894 年の夏にアルメニア人とクルド人とのあいだに衝突が起こり、これにトルコ軍が介入して大量殺戮を行った。¹⁴⁾イギリスがこれに抗議し、フランス、ロシアとともに事件の真相究明のための調査を要請したが、トルコ政府が検討したのは「アルメニア人の犯罪行為」についての調査で、最終的にはイギリス、フランス、ロシアの代表が参加したものの、現地調査は大幅に制限された。それでもヨーロッパ各国の新聞が虐殺事件を連日取りあげ、世論に訴えかけた。プレサンセも当時『ル・タン』紙の論説員としてアルメニア問題に関する社説を書いていた。(ファーヴルはそうした呼びかけに応答したうちの一人である。)一方、コンスタンティノープル駐在の各国大使はトルコ政府にたいする抗議を取りまとめようとしたが、かえって互いの利害対立が表面化してしまう。ようやく 1895 年 1 月にアナトリア東部の行政改革案を提出したが、トルコ政府に改革実行を迫ることはできなかった。トルコ皇帝は、こうしたヨーロッパ列強間の利害対立と微妙な力のバランスを利用するかたちで、アルメニア問題を巧みにかわしていた。1895 年 9 月 30 日、改革を実行に移さないトルコ政府にたいしてアルメニア人たちがコンスタンティノープルで抗議デモを行った。これを軍が鎮圧し、10 月に入ると東部アナトリアでも大規模な虐殺が再開された。ソシュールのテキストのなかの「18ヶ月前」の「一撃」というのは、おそらくこのことを指している。ソシュールからすれば、アルメニア人たちをめぐる状況は、プレサンセら「情緒的な人たち」がいくら騒ぎ立ててもけっして改善されることはなく、それはあくまで政治的な問題である。「民族の虐殺」は「当然起こりうる事態」であり、それを理解しないのは「大間抜け」である。ソシュールは徹底的に「情緒」を削ぎ落とし、きわめて冷徹な眼差しをもってこの歴史的事件を見つめていると言える。

外交官のなかには、賛嘆すべき信仰をもっている人たちがいる。彼らの狂信にはお手上げだ。しかし逸材 P (プレサンセ) 氏が書いた『ル・タン』(2 月 4 日) の記事は、積極的に後代まで読み継がれるに値する。それが最初から

最後まで大真面目に書かれていることは言うまでもない。

[約5行分の空白] 等々。 —

同意するこれらの大使たちには啞然とさせられるではないか。 — 結局、それが同意するためでなかったら、どうして大使が遣られようか。 — そして手首を切断されたり膝の上で可愛い我が子を切り刻まれた憐れな連中にとって大変結構なのは、その作業の仕方が今後外交官たちの間で異議なく決定されるものであるという考えである。モリエール、君はどこにいるのか？ 君は医者しか知らなかった、君は外交官を予想していなかった！

蓋しこの大いなる同意が<正式に>調印・署名された暁には、クレタ人たちに夢のような諸改革を譲与した1878年の公式のハレパ協定とまったく同じ価値をもつであろう。その後そうした諸改革のうち一つとしてヨーロッパの外交を動かさなかった。そうした諸改革のうち一つとして実行されなかった。クレタで先ごろ展開された虐殺と焼打ちの年は、この外交官たちが自分たちでした約束にたいして<18年間>呑気に軽視してきたこと以外に原因がないのだから。クレタ人たちに救いの手が差し伸べられるなどと、誰が<真面目に>考えられるというのか。大使館の喫煙室で煙草を燻らせることを許されていた者なら誰にとっても、そんなことは愚の骨頂ではないか。クレタ人たち！ アルメニア人たち！ もういいから放っておいてくれ！ ごく下卑た言い方をすれば、これこそがこの不吉な事件についての本当の言葉である。 — 18ヶ月前にトルコで起こったすべてのことは、ひとえに外交官たちの無能さのせいである。彼らは — スウェーデンの大臣を除いて — コンスタンティノーブルで殺戮が展開されているあいだも、その6週間後も、テラピアの保養地を離れなかったのだ。同様に、この青白い人物たちの集まりが未来のために有益な仕事をしてくれるだろうなどという考えは、ほとんど傑作喜劇のようなものだ。彼らが内輪話で決めたことが知られるようになったら、途端にスルタンはどっと笑い出すのではないかと私は危惧している。しかし彼は間違いなく先手を打っていることだろう。そして「ヨーロッパのコンサート」と黙って向き合うどころか、トルコ帝国の三点ないし四点を新たに変革したうえで向き合うくらいの巧妙さをもっていることだろう。周知のように、外交官たちの最近の傑作は、彼らのご苦勞な会談と彼らの政府による批准とのあいだにラマダンの期間を置いたことであり、そうしてこの間、皇帝アブデュル＝ハミトに術策を練る時間を目一杯与えてしまった。¹⁵⁾

1878年のハレパ協定というのは、オスマン・トルコの圧政に対してクレタ島のギ

リシア系住民が起こした暴動を鎮静化するために、ギリシア系住民に大幅な自治を認めるというものだったのだが、それはギリシア本国との統合を主張する急進派の台頭を招く結果となり、かえって「秩序回復」の名目でクレタ島へ軍隊を派遣する口実をトルコに与えることになってしまった。そしてハレパ協定から「18年」後の1895年9月、再びギリシア系住民による暴動が起こり、トルコ軍は今度はすぐにその鎮圧に乗り出す。クレタ島全土で繰り広げられた暴虐は1896年の夏ごろまで続いた。「クレタで先ごろ展開された虐殺と焼打ちの年」というのは、おそらくそのことを指している。

実質的には崩壊寸前のオスマン・トルコ帝国は、相対立するヨーロッパ列強各国の利害のバランスの上でなんとかその命脈を保っていた。ソシユールの議論はこうした歴史的・政治的状況を踏まえたものであり、オスマン・トルコによって繰り返されてしまったアルメニア人虐殺は、利己的かつ無能な列強の外交官のせいだと言っている。

手稿の空白部分には、内容と分量から判断して、1897年2月4日付けの『ル・タン』紙に掲載されたプレサンセの記事の一部が切り抜かれて貼り付けられていた。

ところで、この有効な、あるいはむしろこの欠くべからざる条件は、最終的に実現されるように見える。大使たちの全会一致決議の精神的効果は計り知れないだろう。ボスポラス海峡の兩岸の政治家や外交官たちは目を疑っている。いつも最後の一步手前で、最善の意向を裏切って文明世界の活動を麻痺させる反乱分子が現れるのを見慣れているので、彼らはヨーロッパの案がまたも目前で座礁するに違いないと予想していたのだ。

そんな幻想は捨てなければならない。ほとんど前例のない、この並外れた現象が起こった。6人の大使が一つの改革案を吟味し、綿密に議論し、彼らの計画の直接的・間接的帰結すべてを注意深く検討し、およそ起こりうるすべての事態を予見・予測したのだ。そして彼らはその諸提案の基本理念そのものについてだけでなく、作業の仕方や、必要な場合には欠かせない強制手段の行使についても合意し、その姿勢を変えなかった。¹⁶⁾

この記事が『ル・タン』に掲載された1897年2月4日は、ソシユールの指摘するように、ラマダンに入る直前の時期であり、在コンスタンティノーブルのヨーロッパ各国大使は改革案について詰めの協議を行っていた。プレサンセの当該の記事のなかの表現を借りれば、「ヨーロッパのコンサート」は「音合わせ」を済ませ、「交響曲」を奏でようとしていた。プレサンセは「コンサート」が首尾よく成功を収め

るであろうと楽観視しており、この事態に「感動」すら覚えている。また、クレタ島からの「悪い噂」や「不安を煽る情報」をあまり信用すべきでないとし、アルメニア人虐殺事件はクレタの二の舞にはならないと考えている。

これにたいしてソシュールは、「18ヶ月前」のアルメニア人虐殺事件を「18年間」解決されていないクレタ問題になぞらえ、いずれもその責任は列強の外交官たちにあると考えている。ただし、アルメニア問題とクレタ問題を比較するのはソシュールの独創というわけではなく、『ル・タン』紙をはじめ当時の各新聞は、アルメニア、クレタ島、コンスタンティノーブル、マケドニア、シリアなどで生じている問題を一括りにして「トルコ情勢」として報じていた。ソシュールはおそらくいくつかの新聞を読み比べながら、「トルコ情勢」を日々つぶさに追っていたのだろう。そしてやはりこのときも手紙を書こうとした形跡がある。

私はプレサンセの書く記事を脇へ除けるが、しかし『ル・タン』が別のやり方で、あなたが引用した言葉によって Mechveret [青年トルコ党の機関紙] の判断にコメントするためには、オスマンの国庫が素寒貧である必要があるし、また小切手のサービスが慣例に則した通常の活動を再開しないような場合、オスマン大使館に嚴重な警告を与えるかについて、エブラールが判断している必要がある。

(そもそもあなたは私以上にそのことを疑っているわけではない。クラティウス)¹⁷⁾

ここで名前があがっている「エブラール」というのは、当時『ル・タン』の編集長だったアドリアン・エブラール (1833-1914) のことを指していると思われる。この人物は政財界と太いパイプをもち、1892年のパナマ疑獄事件の際には、ユダヤ系資本家と通じていたことを『ラ・リーブル・パロール』紙でドリュモンにスクープされている。末尾にある「クラティウス」(あるいは「クレティウス」?) はソシュールのペンネームである可能性もあるが、詳細は分からない。ただ、手稿の筆跡から判断して、ソシュールが記したものであることはまちがいない。名宛人の「あなた」が誰かも不明だが、ソシュールはかなり具体的で細かい点におけるエブラールの政治的影響力について触れているので、もしかすると『ル・タン』や政財界の内部事情に通じていたのかもしれない。上で見たプレサンセの記事についても、『ル・タン』紙では社説など政治的な記事は基本的に匿名で掲載されていたため、一般の読者には誰が執筆したものなのかは分からないはずだった。ソシュールは当該の記事の執筆者をプレサンセと特定したうえで、文字通り切って捨てる。それは、プレ

サンセが政治に疎く、ヨーロッパの外交官たちの「作業」を手放しに称賛しているからである。プレサンセのような楽観的で「情緒的な人たち」には、過酷な「歴史の教訓」¹⁸⁾が突きつけられることになる。

親アルメニア派の人々、<たとえば>5,000の人間がひとつの教会堂のなかで焼き殺されたことに憤激してしまうようなこの情緒的な人たちに、およそくぶちまけられなかった<嘲罵の類はなかった。同じく遊び>がカリギュラを楽しませていたということ、我々はずっと昔から知っているではないか。19)

親アルメニア派の人々はおよそあらゆる仕方で世間の不評を買った。たとえば、たったひとつの教会堂のなかで5,000人が生きてまま焼かれて、その扉に深さ50センチの人間の脂があったとき、パリではどうして慈善バザーの記録を破るように事が運ばなかったのか。²⁰⁾

「5,000の人間がひとつの教会堂のなかで焼き殺された」とあるが、これはおそらくウルフア（アルメニア西部）の教会堂に逃げ込んだアルメニア人が焼き殺された1895年12月の虐殺事件のことを言っている。「扉に深さ50センチの人間の脂があった」や、上で見た手稿のなかの「手首を切断されたり膝の上で可愛い我が子を切り刻まれた憐れな連中」といった表現はおそらく新聞記事からそのまま持ってきたものだろう。そうした虐殺事件の記事を読んで「憤激してしまう」「情緒的な人たち」のことをソシュールは、『ル・タン』あるいは『ル・デバ』を鵜呑みにする完全な親アルメニア派であり、外交的眞実にも外交的機微にも縁遠い人間²¹⁾と皮肉っている。このようにソシュールは事態を冷静かつ客観的に分析し、「情緒的な」親アルメニア派を辛辣に揶揄している。そして彼自身は救済活動に協力も共感もせず、力が支配する国際政治の舞台をただ傍観しているだけとも言える。

2. (3) ドレフュス事件

1894年11月頃にホイットニー追悼文の草稿に差し挟むかたちで間接的にドレフュス事件に触れてからちょうど3年後、ソシュールは今度は明示的にドレフュス事件について言及する。

Dixi と題された『ラ・リーブル・パロール』の記事はある反響を引き起こした。今やエステラジー少佐に対して非難が浴びせられる局面に到っている。実際この将校が表明するところによれば、彼が犠牲になった陰謀というのは

『ラ・リーブル・パロール』が告発したものであり、彼自身が数週間前に告知知らされていたものである。そこに興味深い点がある。*Dixi* で明らかにされた情報において、この陰謀の核心はどこにあるのだろうか。それは、偽造文書を作成する状況にいた X. Y.なる人物の、ユダヤ人たちによる買収にある。この人物の名前は、必要なら公表されるだろう。ではこの人物はいったい誰だったのか。『ラ・リーブル・パロール』がそこにそれほどの重要性を認めていないようではあるが述べているように、それはたんに軍務省の高官なのだ！
したがって明日この人物はジレンマに追い込まれるだろう []²²⁾

『ラ・リーブル・パロール』紙に«*Dixi*»（「私は言った」）と記された記事が掲載されたのは1897年11月15日のことである。その2日前の11月13日、『ル・タン』にシューレル＝ケストネル（1833-1899）の書簡が掲載されたことで事件は一気に再燃した。翌14日には『ル・フィガロ』に「シューレル＝ケストネル氏の文書」と題された記事が掲載される。«*Vidi*»（「私は見た」）と記されたこの匿名記事は、シューレル＝ケストネルがドレフュス事件の真犯人に関する決定的な証拠を握っていることを示唆している。²³⁾そしてさらにその翌日の15日に«*Vidi*»にたいする反論として«*Dixi*»が発表されたわけだが、その序文には「ドレフュスを救うためにユダヤ人によってたくらまれたマキャベリ的陰謀の内幕を暴露しよう」と思い立ったということが述べられている。この日、マテュー・ドレフュスは軍務大臣ジャン＝バティスト・ビヨー（1828-1907）にエステラジー告発状を提出する。この告発状は翌16日に『ル・フィガロ』をはじめ各紙で公表され、このときはエステラジーの名前があげられている。エステラジーはその日の午前アヴァス通信社を訪れ、自分についての調査を軍務大臣に要請する公開書簡を手渡した。17日付けの『ル・フィガロ』によれば、このときエステラジーは「ひどく激昂した」様子で、「ドレフュスを無罪にするために陰謀が仕組まれ、ドレフュス本人がすべてを操っている」と語ったという。

当該の手稿が書かれたのは1897年11月17日前後であると推定されるが、このとき新聞各紙のあいだで情報が錯綜しており、ソシユールはおそらく『ラ・リーブル・パロール』、『ル・フィガロ』、『ル・タン』など複数の新聞を読み比べながら、にわかにエステラジーなる人物が被疑者として現れ新たな展開を見せるドレフュス事件に注目し、この文章を書いたと思われる。

ドレフュス事件に関するソシユールの立場は次の文章から窺い知ることができる。

私はレヴィルの話に好意を寄せようとしてみたものの、それはまったく私の心を捉えなかった。お利口な男の子がママに手紙を書いていると言ってもいいようなこの文書は何なのかと私は訝しく思う。まず二つのことのうちの一つは、レヴィル氏がレヴィル氏の名で書いている、ということである。私は文章の冒頭に掲げてある賛辞を読んだが、この賛辞を伴い、著者名が伏せられているこの記述が何を意味していたのかが問われるところである。それとも、彼は本当に友人の手帳を転載しているのか。その場合レヴィルはどのように署名しているのか。――著者にまつわる不確定さは、著者が有しているように見える興味深さをこの日記から奪っている原因の一つである。そのきわまりない子供っぽさが第二点目である。しかしさらに第三がある。

この日記が日ごとに、指示されている日付に執筆されたということ、私はきわめて疑わしいと思ってしまう（私はれっきとしたドレフュス主義者であるが）。私はそれについての明らかな証拠をすでにいくつか蒐集したが、その数は日を追うごとに増えている。ひとつの批判にたいしてさらなる批判が加えられる。真実を愛する者はみなドレフュスの勝訴を望むだろうが、そのために真実が犠牲になってはならない。

いずれにしろ、仮に私が間違っているにせよ、なぜレヴィル氏は半分しか署名していないのか。²⁴⁾

ここで話題になっているのはアルベール・レヴィル（1826-1906）の『ある知識人の行程』²⁵⁾である。レヴィルは神学者で、1880年にコレージュ・ド・フランスで「諸宗教の比較史」という講座を開講している。ソシユールは同じ年にパリに来ており、またレヴィルもジュネーヴで学んだことがあるが、両者に交流があったのかどうかは不明である。

『ある知識人の行程』は、ドレフュス逮捕が報じられた1894年11月1日から1898年1月10日までの間、「ある知識人」がドレフュス派になるまでの行程を断続的に書き綴った日記である。だが実際に日記を書いたのはレヴィルではなく、「独身で、高等教育の講座を担当している、ひとりの古い友人」であり、名前を出さないという条件でレヴィルに転載を許可したという。ソシユールがレヴィルに好意を寄せることができないのは、日付と著者ないし署名の疑わしさがあるからである。ソシユールは「私はれっきとしたドレフュス主義者である」と言っているが、レヴィル（あるいはその友人）や他の多くの「知識人」と同様、「ドレフュス主義者」になった。つまりドレフュス事件が進展する過程でドレフュス派に転向した。おそらくソシユールは、自分が「ドレフュス主義者」になる行程と「ある知識人」のそれとを重ね

合わせ、その日記があまりにもよくできすぎた話だという印象をもち、事後的な創作ではないかという疑いを抱いたのだろう。筆者の知る限り、ソシュールがドレフュス擁護のために署名活動などの実際の活動に参加した形跡はない。ソシュールはただ「真実を愛する者」として「ドレフュスの勝訴を望む」。「真実」である限りにおいて「ドレフュスの勝訴」は望まれている。「ドレフュスの勝訴」のためだからといって、「真実が犠牲になってはならない」。極論を言えば、より重要なのは「真実」のほうであって、「ドレフュスの勝訴」ではない。「真実」はエミール・ゾラ(1840-1902)の掲げた「真実」と「正義」から援用しているのだろうが、ソシュールに「真実」があつて「正義」がないのは、おそらく偶然ではない。ソシュールの政治思想的な立場は、正義、人道主義といった道徳的価値や情緒、感情を一切排除するところにある。だからこそソシュールは、同じ「ドレフュス主義者」であつても、ドレフュス派に転向する過程を無邪気に書き綴るレヴィルに好意を寄せず、その中途半端な署名(匿名性)、日付の疑わしさを批判するのである。それゆえソシュールは「真実」だけを掲げる「ドレフュス主義者」であると言うことができるだろう。

3. 結びにかえて——ジュネーヴの「知識人」たち

今後のソシュール研究の展望として、1996年に新たに発見された手稿によって、ソシュールの伝記的記述に新たな事実を追加したり、場合によっては修正したりする必要が出てくるだろう。今回紹介した政治的言説については、特に言語学者としてのソシュールしか知らない者にとっては、おそらくかなり意外であり、衝撃的でさえあるだろう。しかし、スキャンダラスな内容を含んでいるというだけで安易にソシュールを貶めたり、逆に無理な解釈や弁明によって救おうとしたりするべきではない。従来ソシュールに政治性を見出すような研究がほとんどなされてこなかっただけに、それをどう読むのかという解釈する立場そのものが問われることになる。この新資料の発見によって、ソシュールをドレフュス事件の時代に活躍した「知識人」の同時代人として見る視野が開けたと考えるべきではないだろうか。それを踏まえたうえで、当時の政治的状況とソシュールの学説とのあいだにどのような関連性があるのかを究明することが今後の重要な課題である。またジュネーヴの町が持つ特殊性についても併せて考慮しなければならない。この町で、亡命してきた若いアルメニア人たちがフンチャク革命党を結成し、レオポルド・ファーヴルが国際親アルメニア同盟を発足させ、エドゥアール・ナヴィル(1844-1926)がそれを引き継いだ。ソシュールの政治的言説はジュネーヴで活動していた「知識人」との関わりにおいても捉えなければならない。

※注記・凡例

- ・ ソシユールの手稿の邦訳は著者によるものである。
- ・ < >は原文において加筆された部分であることを示し、[]は著者が補足的に施した括弧である。
- ・ « Ms. fr. »: ジュネーヴ図書館 (BGE) 所蔵、フランス語手稿目録番号。
- ・ « Archives de Saussure »: ジュネーヴ図書館 (BGE) 所蔵、ソシユール家寄贈資料。

注

- 1) 本論は金澤の課程博士論文『ソシユールと言語学』（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2008年）の一部をもとにした日本フランス語フランス文学会2009年度中国・四国支部大会（2009年11月28日、於岡山大学）での発表原稿に大幅な修正・加筆を施したものである。
- 2) Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye, avec la collaboration d'Albert Riedlinger, Payot, Lausanne et Paris, 1916.
- 3) Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de linguistique générale*, édition critique par Rudolf Engler, tome 1 (1967-1968), tome 2 (1974), Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- 4) 引用文中の [] は手稿で空白になっていることを表す。以下同様。
- 5) Ms. fr. 3297 (= N 10), pp. 30-31.
- 6) Ferdinand de SAUSSURE, *Écrits de linguistique générale*, établis et édités par Simon Bouquet et Rudolf Engler avec la collaboration d'Antoinette Weil, Gallimard, Paris, 2002.
- 7) Archives de Saussure 371/2, f. 9b.
- 8) *Cahiers Ferdinand de Saussure*, n° 21, Librairie Droz, Genève, 1964, p. 93.
- 9) *Ferdinand de Saussure (1857-1913)*, éd. Marie de SAUSSURE, Genève, Albert Kundig, 1915.
- 10) « Souvenirs de F. de Saussure concernant sa jeunesse et ses études », *Cahiers Ferdinand de Saussure*, n° 17, Librairie Droz, Genève, 1960 ; Ms. fr. 3957/1.
- 11) Cf. *Léopold Favre*, éd. Édouard FAVRE, Albert Kundig, Genève, 1923.
- 12) Émile BENVENISTE, « Ferdinand de Saussure à l'École des Hautes Études », Extrait de *l'Annuaire 1964-1965*, École Pratique des Hautes Études, IVe section, sciences historiques et philologiques, Paris, 1964-1965.
- 13) Archives de Saussure 371/3, f. 21.
- 14) Cf. 藤野幸雄『悲劇のアルメニア』新潮選書、1991年。

- 15) Archives de Saussure 371/3, ff. 22a-22b.
- 16) *Le Temps*, le 4 février 1897.
- 17) Archives de Saussure 371/3, f. 20.
- 18) Archives de Saussure 371/3, f. 23.
- 19) Archives de Saussure 371/3, f. 27.
- 20) Archives de Saussure 371/3, f. 28.
- 21) Archives de Saussure 371/3, f. 30.
- 22) Archives de Saussure 371/2, f. 11.
- 23) Patrice BOUSSEL, *L'Affaire Dreyfus et la presse*, Librairie Armand Colin, Paris, 1960, pp. 123-126.
- 24) Archives de Saussure 371/2, f. 12.
- 25) Albert RÉVILLE, *Les étapes d'un intellectuel — À propos de l'affaire Dreyfus*, P.-V. Stock, Paris, 1898.